
The God of Death(0)

seiron

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The God of Death (0)

【Nコード】

N9135D

【作者名】

seiron

【あらすじ】

表から裏へと落ちた少年は組織に属す。表を操る、社会の本質とも言える裏の世界。それは大きな組織、表向きは会社によって操作され続けている。安定を臨まない物達が動き出した時、少年は守りきれなかった過去と直面する……。

Chapter(0) Story in Arsgalz(ストーリーイン)

The God of Death

Chapter(0) Story in Arsgalz(ストーリーイン アースガルド)

西暦20XX年 日本、東京都中心区

銃声が一つ鳴り響き、沈黙の後に悲鳴が上がり始める。

窓の外から中の様子を覗く、中はパニック状態だ。

会場には金持ちで平和な世界に暮らす奴らばかりだ、そうそう収まるわけがない。

振り返ると手を一度、素早く振り合図を出す。窓から漏れる光で俺の姿は見えるはずだ。闇の中から一瞬小さな光が浮かぶと窓へと向き直る。

窓のガラスに美しい満月が映る、発見はされやすいが動きやすい、いい夜だ。

「進入開始……」

右手には換気口が見える、ドラマや小説であそこからはいるが、機動力が落ちる。

俺達はそんなところから入るような馬鹿じゃない。

窓に手をかけるとあっさりと開く、予定通りに……だ。

それと同時に向かい側のガラスが数枚割れ、光を反射させながらガラスの破片は舞い降り、着地と同時に数名の顔を斬りつけ、またもや悲鳴が響き渡る。

全ての人物の視線がそこに集まる、その瞬間窓から十数メートル下に飛び降り、着地と同時に重心を崩し、音を消し去るとそのまま回りを見る暇なく、予定通りに廊下へと駆け込む。

そして一番手前の扉を素早く開けると、もう一度ガラスの響く音が聞こえ、それを合図に暗やみに包まれたその部屋へと身を隠し、腕の付けたデジタル時計を見ながら呟く。

「二十……十……」

扉を開けると、腕を伸ばしその人物の胸ぐらを掴み引きずり込む。抵抗は一切無いと言うよりも、抵抗などする時間はない。部屋に入るとほぼ同時に扉を閉め鍵をかけると、耳を澄ます。

扉の開く音、そして何人かの足音が聞こえ出す。報告では五名か……

そして、処理に移る、銃の先をそいつのこめかみへと移動させると、何も言わせないまま引き金を引くと銃声が響き渡る。

廊下を歩く音が止まり、足音が早くなると扉を叩き、口々に生命の確認をとる。

窓によると窓に手をかけ、開け放つ。夜風が気持ちよく顔を撫でる。ここは五階にある客室用の部屋だ、もちろん、俺の為に用意された部屋ではない。

扉を叩く音は、扉を壊し進入しようとする音に変化している。

腕をめくり、電波時計へと目をやる、時間通りだ……

「五……四……三……二……一ッ」

最後の言葉は空中で発する、中に舞い出るとともに、重力に体を捕まれる。

それに引きずりおそられるよりも早く、開けた窓へと手を伸ばし、弾きそれを元の状態へと戻すと、扉の碎ける音が響いた。

先を確認せずに、右腕を闇へと伸ばすとそこに触れる縄の感触、ついで左足を思いつきり伸ばすと足の裏に何かが触れる、それを蹴り飛ばすと体は振り子のように揺れはじめた。

そこで伸びる腕、それを左腕で掴むと窓からその部屋へと体を引きずり込まれる。

先ほどまでいた部屋と同じように、電気は一切点けられておらず、月明かりのみで部屋の中が覗ける。

そこから廊下へと躍り出ると、部屋の中にいた人物を開け放った窓から飛び降りさせると、俺自身も窓枠を蹴り飛ばし、そこから身を投げると今度こそ、重力の腕に体を捕まれ引きずり込まれる。

三階の廊下を歩く男と四階の客室から出てくる男、落下を続ける状態からそれに向かって二発、鉄の玉を放つと正確に胸の中心へと吸い込まれる。

そして、視界が館の回りを囲む壁へと変化する。

道と館との境界線であり、道からの攻撃を防ぐ鉄壁の壁、それが侵入者であり、暗殺者である俺達の身を隠してくれる。何であれ一長一短だ。

俺を迎えたのはコンクリートの道ではなく、人の腕だ。ボールをキヤッチするように抱きかかえるようにして、受けとめる。音はない。

そして向かってくるワゴン車、それが通り過ぎた後には元いた場所には俺がいた痕跡は残っていなかった。

「ふう……。今回も無事任務終了です」

彼は隣の椅子に深く腰掛け、帽子を脱ぐとそれで顔を仰ぎながら、懐からたばこを取り出すと、それを吸い始める。その煙が鼻の先をくすぐる。

「ハルさん、たばこ吸うなら窓開けて下さいね。」

運転席からすかさず声が跳んでくると、男は渋々窓を少し開ける、すると煙はそこから外へと逃げ出し始める。

ハルと呼ばれた男……ハルこと青葉春斗は俺の相棒であり、兄貴的存在と言えはいいだろうが、無造作に生えた黒髪の奥には鈍く黒い瞳が光っている。歳は聞いたことはないが、外見は二十代前半だろうからそれぐらいなのだろう。

口から煙をはき続けるハルに話し掛ける。

「彩の奴、ちゃんと脱出できたのか？」

弥彩、俺達と共に任務についた俺と同じ歳で一年前から色々世話になってる。弥彩、なかなか読まれないが、アマネ アヤと読む。

「アイツのことだ、何かあったらそれはそれで何とかするだろ」

「大丈夫です。さつき連絡があつて、渋滞で少し遅れるそうです」

ハルが適当に答えた後、運転席から正しい情報が聞こえてきた。俺はそうか、と呟くと体を椅子に任せる。

「今日の任務、最後の二人だけだ。」

あそこであの場にいなかったら、失敗に終わったよな。」

そう言うと、ハルがのんびりとした口調で返事を返した。

「今回は、情報はさんざんあったのに、時間が無かつたんだ、取引と愛人に会うためにあの二人があそこに出てくる確率は70%以上、上手くいったんだから良いだろ？」

火のついたままのたばこを指先で左右に振る、先で燃えている火が暗闇で光ってまるで蛍のようだ。

「運も実力の内って言うだろ？」

たばこをくわえると、ハルはさらに続けた。

「それにしても、毎回感心させられるな。」

俺達の組織に突如姿を現し、そして十五で組織に所属する者でも難しいと言われるA級の任務を毎回楽々とこなした。束ねられた銀の髪は月夜にきらめき、音も立てず接近し標的は逃がさない、計画通りに事を運ぶ

本日にて十六歳になった、銀浪のアキラ。

今回の任務は、銀浪の強運のおかげで成功したんだよな、銀浪？」

「ハル、その名前あんまり好きじゃないんだけど」

「別にいいだろ、銀浪？」

ちょうど満月だ、狼男に変身してみる」

ハルは再びたばこを吸い出す。

これからややこしいことが起きるような気がするから、先に自己紹介をした方がいいかもしれない。

俺の名前は月夜暁、ツキヤと読む決してツキヨではない。他のメンバーにはアキラや銀浪と呼ばれている、銀浪と呼ばれる理由は、この長い銀の髪からなのだろう。あまりにも長いため、紐で括って

はいるのは彩のアイディアだ。正直どちらでも良いのだが……

街に座り込み、ただ自分を避けて歩いていく大人達を眺めていた毎日、そんな毎日に手を差し伸べてきたのがハルだった。

生きるための技術と、この世界について様々なことを教えてくれたのがハルだった。

俺よりも二年も先に組織に入っていたハルは、俺を弟のように、いつしか相棒として、育ててくれた。

一度何故暗殺の仕事を受けるのか？ と聞かれたことがある、俺がハルに付いていったときからその理由は変わっていない、俺は彼女を見つめ、そして……殺すためだ。

最後に言っておくが、いくら銀狼と呼ばれようが、人間が狼男に変身なんてできるわけがない。もし出きる人間がいたとしても、俺はそんなことは出来ないのです、悪しからず。

Chapter (0) Story in Arsgalz
END -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9135d/>

The God of Death(0)

2010年11月24日15時40分発行